

錦織監督

映画の現場から

●●●
19

価値観の転換期に送り出す映画「渾身」

謹賀新年。2012年元旦。昨年、東日本が忘れてはならない未曾有の震災に見舞われ、自然の怖さ、人間の無力さを痛感させられた。震災に立ち向かう人々の真摯(しんしん)なその姿にあらためて日本人の素晴らしさを感じ、名もなきリーダーたちが地域のために働く姿に涙した。

新年を迎え、生かされていることに感謝する気持ちが自然とわき上がってくる。大きな犠牲の中、残された私たちはどうすればいいのかとあらためて思う。戦後、右肩上がりの繁栄を享受してきた日本が大きな転換期を迎えている。

太平洋戦争に日本が負け、それまでの価値観と真逆のカルチャーが日本に押し寄せてきたのが数十年前。今まで学校で習っていた教科書のほとんどが

真の日本の良さ発信を

墨で塗りつぶされたというから、価値観が180度変わったと言っている。

占領政策の中、映画が大きな役割を果たした。生活やファッション、音楽などが映画の中に詰め込まれ、シャワーのように日本に降り注いだ。私自身、昭和30年代の生まれなので高度経済成長とともに育った。物質的豊かさが人間の幸せに直結するというイメージの中で育ち、大人たちもそれを疑わなかった。今でも洋画といえ、ほとんどがアメリカ映画だが、子供のころのテレビドラマの多くもアメリカのドラマだった。多くの日本人が大量生産、大量消費のアメリカ方式に憧れた。

皮肉にも震災を通して見られた、日本人の穏やかさや、日本人に自然と身についている「万物に対しての畏敬の念」などがかっこいいとばかりに、今、日本人が日本人に誇りを持ち始めている。今こそ日本文化を再検証し、真の日本の良さを逆発信しなければと思う。

「白い船」や「うん、何?」「RAW I LWAYS」の中で描いた人たちは、そのまんま日本の田舎に存在するという自負がある。今時こんな所ないよ、ファンタジーだよと言った人たちに、日本の地方にはそんな穏やかなコミュニティが存在し、世界の範となる古(いにしえ)からの価値観がある、ということを知ってもらいたい。島根で撮った4本目の映画にはそんな思いを込めた。

隠岐の島には、地域活性化とか、村おこしとかいう言葉が空虚に思えるほどの熱い人たちがいた。島の人たちが誇りに思える映画にするのはもちろんだが、多くの人たちに感動が届けられるのではないかと思う。価値観が変わると思う。隠岐の映画「渾身(こんしん)」にご期待いただきたい。(次回から映画「渾身」について詳しく!)

(錦織良成・映画監督)

第2、4金曜掲載

土俵を囲む一ご協力いただいた島民の皆さま—

